

短大生の高齢者像と自己のライフプランとの比較に関する一考察

—福祉研修会における学生アンケートの結果から—

小澤 薫・小池 由佳・石本 勝見

Attitudes of college students toward the elderly and their future images

Kaoru OZAWA, Yuka KOIKE, Katsumi ISHIMOTO

はじめに

生活科学科生活福祉専攻では、講義や演習、実習の他に年に一度、学生のための福祉研修会を実施している。2006年度は、高齢者理解と読み聞かせの技術の習得を目的として、「人生80年の朗読」と題して、80歳を超えてなお現役で朗読を続けられている辻直正氏に講演をお願いした。この研修会に先立って、学生が描く「高齢者」のイメージ、80歳の方に対するイメージを尋ねた。あわせて、自分自身の50歳以降の将来設計を書いてもらった。その上で研修終了後、もう一度80歳の方に対するイメージを尋ね、研修を受けて変わったこと、強く思うようになったことを書いてもらった。

本稿では、これらのアンケートを用いて、短大生がどのような高齢者像を描いているのか、自己のライフプランをどのように考えているのかについて比較検討する。その上で、研修会によってどのような変化がみられたかを分析していきたい。

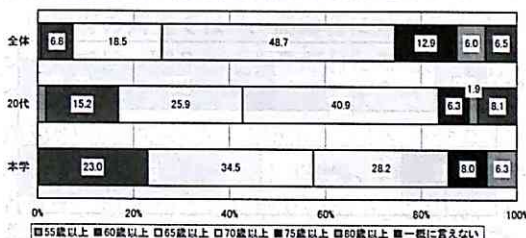
なお、アンケートの対象は生活福祉専攻の学生（1、2年生）だけでなく、所属専攻によって「高齢者」、「80歳」に抱いているイメージに違いがどうかということから事前アンケートを同じ生活科学科の生活科学専攻と食物栄養専攻の1年生（各40名）にも行った。そのため事前アンケートは合計180名、事後アン

ケートは生活福祉専攻の学生（1、2年生）のみ100名を対象としている。

1. 「高齢者」のイメージ

(1) 「高齢者」をイメージする年齢

「高齢者」のイメージを考えるにあたって、内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」（2004年）¹⁾によると（図1）、高齢者をイメージする年齢は「70歳以上」が48.7%と多く、ついで「65歳以上」18.5%、「75歳以上」12.9%となっている。70歳以上が7割以上を占めている。20代だけを取り出したイメージをみると、「70歳以上」が40.9%と一番高くなっているが、「65歳以上」25.9%、「60歳以上」15.2%と、4割が「70歳未満」となっている。20代がイメージする「高齢者」の年齢は、全



（出所）「全体」「20代」は内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」、「本学」は本学アンケートより作成。

図1 イメージする「高齢者」の年齢

体と比べて60代が多いことがわかる。

次に、「高齢者」のイメージとして年齢以外の理由をみると(図2)、「身体が自由がきかないと感じるようになった時期」39.8%、「年金を受給するようになった時期」23.1%、「仕事から引退し、現役の第一線を退いた時期」12.3%、「介護が必要になった時期」12.0%となっている。健康や介護、年金や定年が大きな割合を占めている。また、20代をみのイメージをみていくと、「身体が自由がきかないと感じるようになった時期」30.1%と一番大きくなっているが、全体と比べて10ポイント低くなっている。その分「年金を受給するようになった時期」、「仕事から引退し、現役の第一線を退いた時期」がそれぞれ6ポイントずつ高くなっている。20代では、身体的な要因からイメージするよりも、年金の受給や定年からイメージする比率が大きくなっている。このようにイメージする「高齢者」は、年齢についても理由についても全体と20代では傾向に違いがみられる。

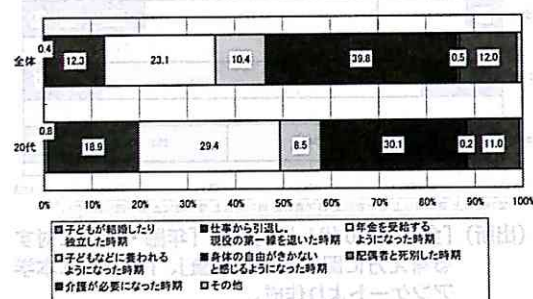
本アンケートによると(図1、表1)、高齢者をイメージする年齢は「65歳」が34.5%と一番高く、ついで「70歳」28.2%、「60歳」23.6%となっており、60代で5割を超えている。内閣府調査の「20代」のみの回答と比べても「60代」の比率が高く、政府の調査と比べて、「高齢者」にたいするイメージは60代の比重が大きくなっている。

内閣府調査とは異なるが、「その年齢を『高齢者』と考える理由」として尋ねたものをみると(表2)、「定年だから」が一番高く28.2%、ついで「年金の受給」が20.1%、体力の衰えや

病気など「体が不自由になる」が17.8%となっている。体が不自由になるという回答に比べて、仕事からの引退、年金の受給が大きくなっている。こうした点も内閣府調査の20代と似た傾向を示している。また、内閣府調査では「子どもなどに養われるようになった時期」が10.4%、20代で8.5%みられたが、ここではそれを契機とした回答はみられなかった。それでも「孫ができる」という回答はあり、孫の誕生が「高齢者」とイメージするものはいた。他には、「70代の祖父母が元気だから」とか「祖父母をみていて、病気やケガが増えたのが70代だったから」など身近な家族につなげて「高齢者」をイメージするものが10.9%いた。また、「60歳から入れる保険のCMをみて」という回答もみられ、テレビの影響の大きさを垣間見ることができた。

次に、イメージする「高齢者」の年齢とその理由をクロスしてみると(表3)、「60歳」と回答した者の57.5%は「定年」を理由に挙げ、「65歳」の場合は、「年金の受給」が51.7%、「定年」33.3%となっている。70歳以上をみていくと、「60代はまだ若いから」という理由で「70歳」としているものが30.6%で、ついで「体が不自由になる」が28.6%となっている。このように、60代は定年や年金の受給が理由として挙げられているが、70歳以上は体調の問題がその理由として挙げられるようになる。また、「65歳」では、高齢化率など政府の指標で用いられていること、それらをこれまでに習ってきたということも理由に挙げているものもいた。イメージとしてもそういったところから考えるものがみられた。

このように、「高齢者」としてイメージする



(出所) 内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」より作成。

図2 「高齢者」とイメージする理由

表1 イメージする「高齢者」の年齢(専攻別)

[上段:人、下段:%]	60歳	65歳	70歳	75歳	80歳以上	総計
科学1年	11	11	14	1	1	38
食物1年	9	16	9	2	3	39
福祉1年	10	16	14	6	4	50
福祉2年	10	17	12	5	3	47
総計	40	60	49	14	11	174
科学1年	28.9	28.9	36.8	2.6	2.6	100.0
食物1年	23.1	41.0	23.1	5.1	7.7	100.0
福祉1年	20.0	32.0	28.0	12.0	8.0	100.0
福祉2年	21.3	36.2	25.5	10.6	6.4	100.0
総計	23.0	34.5	28.2	8.0	6.3	100.0

(出所) 「本学アンケート」より作成。

表2 その年齢を高齢者とイメージする理由（専攻別／複数回答）

[上段：人、 下段：%]	定年だから	容姿から	体が不自由	年金を受給する	60代はまだ若いから	身近な家族をみて	そう習ってきたから	なんとなく	その他	総人数
科学1年	14	5	10	4	4	3	2		5	38
食物1年	10	2	7	8	6	6	3		2	39
福祉1年	13	1	7	14	5	5	6	6	5	50
福祉2年	12	2	7	9	5	6	5	4	7	47
総計	49	10	31	35	20	20	16	10	19	174
科学1年	36.8	13.2	26.3	10.5	10.5	7.9	5.3		13.2	100.0
食物1年	25.6	5.1	17.9	20.5	15.4	15.4	7.7		5.1	100.0
福祉1年	26.0	2.0	14.0	28.0	10.0	10.0	12.0	12.0	10.0	100.0
福祉2年	25.5	4.3	14.9	19.1	10.6	12.8	10.6	8.5	14.9	100.0
総計	28.2	5.7	17.8	20.1	11.5	11.5	9.2	5.7	10.9	100.0

(出所) 表1と同じ。

表3 イメージする「高齢者」年齢とその理由（年齢別比率%/複数回答）

[上段：人、 下段：%]	60歳	65歳	70歳	75歳	80歳以上	総計
定年だから	23	20	4	2		41
容姿から	4	1	5			9
体が不自由	3	4	14	5	5	27
年金を受給する	1	31	3			26
60代はまだ若いから		2	15	2	1	21
身近な家族をみて	3	4	8	2	3	19
そう習ってきたから	2	13		1		9
なんとなく	2	2	1	2	3	8
その他	13	3	3			14
総計	40	60	49	14	11	174
定年だから	57.5	33.3	8.2	14.3		23.6
容姿から	10.0	1.7	10.2			5.2
体が不自由	7.5	6.7	28.6	35.7	45.5	15.5
年金を受給する	2.5	51.7	6.1			14.9
60代はまだ若いから		3.3	30.6	14.3	9.1	12.1
身近な家族をみて	7.5	6.7	16.3	14.3	27.3	10.9
そう習ってきたから	5.0	21.7		7.1		5.2
なんとなく	5.0	3.3	2.0	14.3	27.3	4.6
その他	32.5	5.0	6.1			8.0
総計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(出所) 表1と同じ。

年齢は、定年や年金の受給という社会的要因が大きな位置を占め、ついで体が不自由、外観の変化など身体的要因がイメージを促すものになっている。60代の比重が大きいため、それに合わせる形で定年や年金の受給が大きくなっている。

(2) 80歳という年齢に対するイメージ

次に、80歳という年齢に対するイメージをみてみると(表4)、「元気」という回答が一番多く32.8%、ほぼそれと拮抗するのが「耳が遠い」、「腰が曲がっている」、「病気がち」など「体

が不自由になる」という回答で32.2%となっている。「元気な人もいれば寝たきりの人もいる」とそれら両方を挙げている人、健康な人と寝たきりの人との格差の大きさを指摘する回答が13.2%と、「元気」と「体が不自由になる」のそれぞれ半分程度を占めている。その他積極的なイメージとしては「知識が豊富」など人生の先輩・尊敬されているというのは13.8%、「趣味や生きがいをもっている」6.3%となっている。それとは反対に消極的なイメージとして「家にいることが多い」11.5%、「手助けが必要」9.2%となっている。さらに認知症状の現れ、要介護状態、施設入所など「介護問題」と関連づけた回答は14.9%で、80歳のイメージとしては介護に関する記述が増加している。あと、漠然と「長生き」という回答が8.6%あった。平均寿命から考えると、2004年で男性78.64歳、女性85.59歳であるので、「80歳」という年齢は特別長生きというわけではないがこのような回答が見られるのも1つの特徴といえよう。

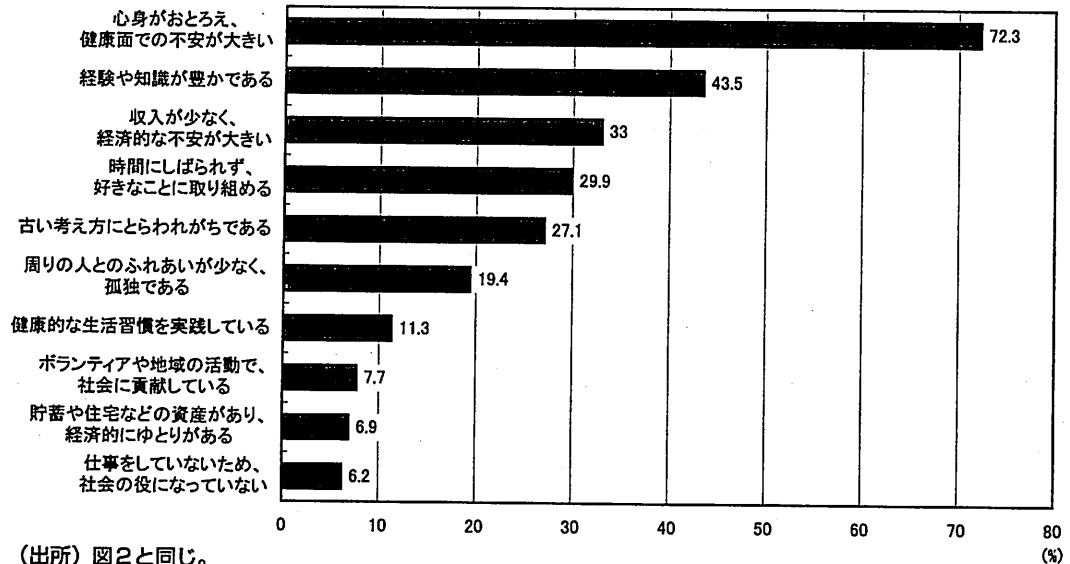
内閣府の調査では²⁾、高齢者に対するイメージとしては(図3)、「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」が72.3%、次いで「経験や知恵が豊かである」43.5%、「収入が少なく、経済的な不安が大きい」33.0%、「時間にしばられず、好きなことに取り組める」29.9%、となっている。このような結果にたいし、「高齢社会白書」では、「健康面・経済面で否定的に、知識や考え方の面や日常生活面で肯定的にとらえている傾向が見られた」³⁾としている。

80歳という年齢に対するイメージと内閣府の調査した「高齢者」へのイメージを直接結び

表4 80歳のイメージ（専攻別／複数回答）

[上段：人、 下段：%]	元気	趣味	知識が豊富	長生きしている	家にいることが多い	体が不自由	手助けが必要	介護を受けている	元気な人もい れそうでない人もい	その他	NA	総人数
科学1年	11	2	4	2	5	19	7	4	6	5		38
食物1年	16	1	3	4	4	14	4	6	7	3	1	39
福祉1年	15	2	8	5	7	12	4	10	5	14		50
福祉2年	15	6	9	4	4	11	1	6	5	6	1	47
総計	57	11	24	15	20	56	16	26	23	28	2	174
科学1年	28.9	5.3	10.5	5.3	13.2	50.0	18.4	10.5	15.8	13.2		100.0
食物1年	41.0	2.6	7.7	10.3	10.3	35.9	10.3	15.4	17.9	7.7	2.6	100.0
福祉1年	30.0	4.0	16.0	10.0	14.0	24.0	8.0	20.0	10.0	28.0		100.0
福祉2年	31.9	12.8	19.1	8.5	8.5	23.4	2.1	12.8	10.6	12.8	2.1	100.0
総計	32.8	6.3	13.8	8.6	11.5	32.2	9.2	14.9	13.2	16.1	1.1	100.0

（出所）表1と同じ。



（出所）図2と同じ。

図3 「高齢者」のイメージ

つけることはできないが、ともに否定的な回答と肯定的な回答がみられるものの、内閣府の方が比較的健康面での不安が大きくでている。また、身近な自分自身の就職についてもなかなか想像しがたい状況の中で、「80歳」は学生にとってみるとはるか60年後のことになるので、イメージの難しさも考慮する必要がある。

2. 自己の高齢者像について

ここでは自分自身が考える高齢者像についてみていく。まず山形県立保健医療大学の調査では⁴⁾、「将来の自己高齢者像」として、「趣味・生きがいもち悠々自適に生活する」が30人（63.8%）と一番多く、「病弱・長生きできない」12人（25.5%）、「家族や友人とともに生活する」

10人（21.3%）、「元気で健康にいる」「活発に生活する」6人（12.8%）、「介護を受け迷惑をかけたくない」「家族と離れて暮らし孤独である」4人（8.5%）という結果になっていた。悠々自適に生活する、元気で健康、活発に生活というイメージが多かったことから、一面として「学生は将来を願望も含めて比較的楽観的に見ている」と考えている⁵⁾。その一方で、病気をもつというイメージは「高齢者の身体的に劣ったイメージと重ねて描かれ」、迷惑をかけたくないというイメージは「精神的な不安定や認知症状の現れなどの精神的なイメージと、家にこもっている、活動範囲がせまくなるという社会的なイメージと重ね合わせて描かれて」いるのではないかと捉えている⁶⁾。

本アンケートでは、「自分自身の50歳以降の生活をどのように予想」するか、誰とどこでどのような生活をしているかということを具体的に尋ねた。

50歳以降の過ごし方として、まず退職が挙げられている。ほとんどが60代前半で退職をすると回答した。できるだけ仕事を続けていくという回答は少なく、退職後ほとんどの人がスポーツや文化活動など趣味や旅行を挙げている。加えて「孫が生まれる」、「孫の世話をする」という回答が88人(59.9%)となっている。退職後の生き方として、「第2の人生」という言葉がよく使われ、趣味や旅行、孫の世話が挙げられ、それが70代後半から80歳になると、「施設に入所している」、「子どもに介護してもらおう」など介護に関する記述が37人、ついで「死亡」33人となっている。年齢が上がるにつれそのような身体機能の低下や死亡といったイメージが増加するが、趣味や旅行など「悠々自適な生活」は59人と依然大きく、近所・地域との付き合い、ボランティア活動もみられた。

家族についての記述もほとんどの人でみられたが、そのなかで「(自分もしくは夫の)両親と暮らす」という回答は5人と少なく、それに加えて「親の世話をする」という回答は4人のみであった。また積極的に子どもの世話になるという回答は9人で、「子どもの世話になりたくない」という回答は10人であった。その他「老老介護をする」という回答は2人いた。このように介護をめぐる家族との関係についてはいろいろみることができた。ただ自分の将来設計において「親の介護」はあまりみられなかった。

次に、イメージする「高齢者」の年齢のときに自分自身がどのようなことをしているかをみると(表5)、圧倒的に趣味・旅行が多く、退職後の「第2の人生」の出発というイメージの大きさがうかがえる。亡くなっているという回答は2人だけで、80歳を超えると「介護」という回答が増加するが、全体として体力のおとろえ、病気がち、介護が必要になるという回答は少なかった。このように趣味や旅行、悠々自適な生活など全体的な状況としては願望も含めた比較的楽観的な見解が多くみられ、山形県

表5 イメージする「高齢者」年齢とその時期における自己の高齢者像(年齢別比率%)

上段:人、 下段:%	60歳	65歳	70歳	75歳	80歳以上	総計
趣味・生きがい	16	28	16	3	1	64
社会活動	3	9	3	2		17
悠々自適	5	8	7	4	1	25
夫とふたり	7	2	5	1	1	16
孫の世話	7	11	6	4	1	29
病気がち	2	1	4			7
要介護			6		5	11
死亡		1			1	2
NA			2		1	3
総計	40	60	49	14	11	174
趣味・生きがい	40.0	46.7	32.7	21.4	9.1	36.8
社会活動	7.5	15.0	6.1	14.3		9.8
悠々自適	12.5	13.3	14.3	28.6	9.1	14.4
夫とふたり	17.5	3.3	10.2	7.1	9.1	9.2
孫の世話	17.5	18.3	12.2	28.6	9.1	16.7
病気がち	5.0	1.7	8.2			4.0
要介護			12.2		45.5	6.3
死亡		1.7			9.1	1.1
NA			4.1		9.1	1.7
総計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(出所) 表1と同じ。

立保健医療大学の調査と似た傾向が示唆された。

ここからイメージする「高齢者」と自分自身の「高齢者像」にはかなり差があることがわかる。福祉研修会はこの結びつけていくことも担っている。

3. 学年、専攻による高齢者像の特徴

このような「高齢者」のイメージについて、生活福祉専攻と他専攻、生活福祉専攻の1年生と2年生の違いをみえる。

まず、イメージする「高齢者」の年齢をみると(表1)、生活科学では「70歳」が一番多くなっているが、「食物栄養」、「生活福祉」は、「65歳」が大きくなっている。75歳以上の比率をみると「生活科学」5.2%、「食物栄養」12.8%と比べて、「生活福祉1年」20.0%、「生活福祉2年」17.0%となっている。「生活科学」、「食物栄養」と比べて、「生活福祉」ではイメージする「高齢者」の年齢が分散していることが伺える。

次にその年齢を高齢者とイメージする理由をみると(表2)、「生活科学」では「定年だから」、「体が不自由」、「容姿から」という回答からイメージする比率が圧倒的に大きくなっている。他と比べて「年金の受給」はあまりみられなかった。「食物栄養」では、「定年だから」について「年金の受給」、「体が不自由になる」となって

いる。他と比べて「元気なイメージ」、「身近な家族をみて」が高くなっている。「生活福祉1年」では「年金の受給」が特に高く、ついで「定年だから」となっている。「体が不自由」、「容姿から」は低かった。「生活福祉2年」では、1年生と比べて「年金の受給」が低く、「身近な家族をみて」が高くなっている。生活福祉共通なものとしては「そう習ったから」という回答が比較的大きいことと、「なんとなく」という回答があることである。「体が不自由だから」や「外観の変化」は比較的低くなっている。イメージする理由としては、「食物栄養」と「生活福祉」で回答が分散しており、「生活福祉」では身体的な機能の低下をイメージする回答は少なかった。その一方で「そう習ったから」という回答が大きいことも特徴であろう。

さらに、80歳という年齢に対するイメージをみると(表4)、「生活科学」は「体が不自由」、「手助けが必要」、「家にいることが多い」という回答が多くなっている。「食物栄養」も「体が不自由」という回答は多いが、それ以上に「元気」という回答が多い。「生活福祉」は「知識が豊富」という回答が多く、「手助けが必要」が少なくなっている。「介護を受けている」は「生活福祉1年」、「趣味・生きがいをもっている」は「生活福祉2年」で大きくなっている。

このように、同じ短大の同じ世代の学生であっても、専攻、学年によって「高齢者」にたいするイメージ、意識に多少ではあるが違いがみられた。なぜこのような違いがでるのか、専攻による学習の違いなのか、学生個々人の経験によるものなのかは明確ではない。しかし、筆者は「生活福祉」の学生は否定的なイメージに偏りが出るのではないかと想定していた。ところが結果では、特別肯定的なイメージにも、否定的なイメージにも偏らず、この点は大変興味深いものである。

4. 研修会後のイメージの変容

これまでみてきたような短大生が描く「高齢者」、80歳のイメージに対し、研修会がどのような影響を与えたか、学生の記述からみていきたい。研修会の詳細については、小池・小澤・石本(2007)を参考にしていきたい。研修

会に参加した学生にたいし、あらためて「80歳という年齢の人に対するイメージ」について尋ねた。そして「(1) 今回の話を聞いて変わったところ」「(2) 今回の話を聞いて強く思うようになったこと」を記述してもらった。

(1) 今回の話を聞いて変わったところ

まず、話を聞いて変わったところとしては、「80歳は、話す内容が古く、利己的な考えを主張する存在という思いがあったが、辻さんは口調もしっかりしていて『まだ若い』という印象をうけた。近所の人や祖父母とは違うように思った」とあり、これは普段接する身近な人と講師の辻氏の違い、講師の力が大きく作用していることは間違いない。それでも「①年をとるというのはどこか暗いイメージ、だんだん体力もなくなり好きなこともできなくなっていくような考えがあった」、「②いきいきとした生活が送れないというイメージ」、「③仕事もすることもなく、趣味の世界や思い出に浸って生きて、新しい楽しみというのはひ孫の誕生だけというイメージ」、「④時間がゆっくり過ぎ、余生を楽しむという感じ」という老いに対する消極的な回答が、今回の研修によってそれぞれ「①今できないことがむしろ年をとってからできたり、新しいことを始めるチャンスが増えたりしそうなイメージになった」、「②いろいろな経験をし、自分の好きなことをやっていれば80歳になっても毎日楽しく充実した生活を過ごすことができると思った」、「③現役という感じがした」、「④80歳を過ぎても自分の仕事をしていけるというのはとてもすごいと思うし、同時にうらやましいと思った。一生を通してできる仕事というのはなかなか出会えないと思うので、私もそういった80歳になれるようにしたい」とかなり積極的なイメージになったと自分自身を捉えている。

実際、「事前のアンケートで、80歳『永眠』と書いたので、今回の研修会で生き活きと発表している辻さん夫妻の姿を見て胸がつまる想いで一杯だった。私は60歳ぐらいまで生きられればもう十分だと思っていたが、寄り添って仲睦まじく暮らしているふたりの様子がとてもほえましく、またうらやましく思った」、「何歳になっても好きなことを生きがいにして生きて

いる姿というのはとても格好良く見えた。今まで将来のことを考えると、『あんまり長生きしても…』って思っていたが、辻さんの話を聞いて『こんな生き方ができるなら長生きするのも悪くない』って思えた。『80歳まで生きたくないと思っていたが、生きたいと思うようになった。80歳になるのが楽しみ』と、年をとっていくこと、長生きをすることへの希望がみえていないものが、そこから希望を見出すものもいた。

また、『80歳という年齢が、自分とあまりにもかけはなれている』と思っていた。でも、実際に話を聞いてみると、そうではないと感じた。80歳の今でも、多くのことを吸収しようと積極的に物事に取り組んだり、人と深く関わりとといったことに気をつけ、私たちがやろうとしていることと同じであった。人生の先輩であるが、だからといって自分たちと違う世界の人とは考えてはいけなかった』と身近な存在として80歳の方を、主観的に考える方向へ移行したものもある。さらに『80歳というと、夫と死別して、ひとりで暮らしている自分を想像した。また、子どもに少し介護をしてもらっているイメージもあった。しかし辻さん夫婦は、仲良く元気で、表情も活き活きして、多少不自由なところはあるけれど、ふたりから『健康』というイメージを感じた。80歳は、生きがいや楽しさをもっていけば、体も心も健康になれると思うようになった』、『自分が80歳になったときのことなんて今まで想像できなかった。けれども今回の研修を通して、理想像をつくることができた』と、漠然とではあるが自分自身の将来像を想像しようという姿勢もみられた。

そして『80歳というと、マイナスなイメージがあり、年はとりたくないという思いがあった。しかし、辻さん夫妻の話、紙芝居を聞き、人生82年分の経験がぎっしりつまっている感じがした。年齢を重ねていくことは、日々学び、楽しいことがたくさんあると感じた。そして、次の世代や次の次の世代に伝え、教えられる知識をたくさんもっていることを改めて感じた』と、研修を通して次世代に伝えていくことの大切さを理解したものもある。

このようにそれまで抱いていたネガティブな

「高齢者」に対する意識が、この研修を通して、ポジティブなものへ変化したという声が多くみられた。

(2) 今回の話を聞いて強く思うようになったこと

次に話を聞いて強く思うようになったこととしては、『その人らしく生きている方とそうでない方との差が激しい』と思った。施設に行ったとき、『何も知らされずにここ（施設）に連れてこられた』と利用者の方に言われたことがある。そのことを思い出した』と、実際の介護の現場で抱いた矛盾とつなげて考えていること、『年のとり方は人それぞれ、施設にも問題行動を取る方がいるかもしれない。それにもその方なりの人生、その方なりの感じ方があってのことだと思うので、なるべく1人ひとりの話をよく聞いて対応を考えたい』と、福祉専門職として仕事に就くに当たってその人を理解することの大切さを挙げているものもいた。

その一方で『私が80歳を越えた頃、小さい子どもたちにうらやましがられる人になりたい』、『80歳、90歳になっても『もう年だから』と諦めずに自分がやりたいこと（新しいこと）に挑戦していきたい』と強く思った』、『ジャンルを問わずさまざまな経験をして、そこから吸収したものが自分に蓄積し、話をするときにそれが自分の味になって出て、人に伝わるという話を聞いて、いろいろな経験をしていきたい』と思った』、『私はまだ20歳で、健康に生きていればいずれ80歳になる日がくる。そうなったときに辻さん夫妻のように、たとえ体のどこかに不自由があっても、生きがいを感じる何かをそれまでに見つけることが大切なんだと思った』という80歳に向けた意気込みもみられた。

さらに『大人になっていくこと、年を重ねていくことが楽しみになった。ずっと学生でいたいと思うことがあったけど、これから社会人になって行動範囲が広がって楽しいことがいっぱいあると思えるようになった』、『年を重ねることは素敵なことだと思う。重ねてきた様々な経験があるからこそ、輝いてみえるのだと感じた。表情が豊かで言葉に重みがあってますます尊敬するようになった』、『年齢を重ねていくことに不安を感じたり、特別周囲にたいして気を使っ

たりする必要はなく、自分らしく自分の人生を送っていくことで、人は輝くことができると思った。年をとったからできないというような考え方は正しくなく、年をとったからこそできることもたくさんあるのではないかと思った」と年齢を重ねることへの前向きの姿勢もみることができた。

また、「80歳はまだまだ人生の通過点であり、終着点ではないので、いろいろなことにチャレンジすることが大切だと思った」、「『もう80歳』ではなく『まだ80歳』という考え方があること。実際にそういう生き方を辻さんはされていて、言葉に現実味があった」、「私は80歳になったらひっそりと静かに暮らそうと考えていたが、辻さん夫婦をみて、80歳になってもまだまだ活動できるということに気づかされた。年をとっても何か自分の生きがいとなるような人に喜んでもらえるようなことを見つけて楽しく生活してみたいと思うようになった。奥さんが『寝たきりになるまで続けたい』とおっしゃったことがすごく印象に残った。そのような素敵な言葉が言えるようになりたい」、「定年年齢を過ぎても、仕事を辞めても社会に働きかけることはできるのだと感じ、そのような生き方も楽しそうだと強く感じた」、「80歳になると、自分の娯楽に日々を費やして楽しく生活しているイメージがあった。しかし、80歳になっても施設やいろいろなところへ行き、今日のように朗読を開かせたり、紙芝居をして、『寝たきりになるまで続けたい』という、とてもパワフルで幸せそうな姿に本当に驚いた」、「いくつになっても、自分の好きなこと、やりたいこと、読みたいものなど自分からみつけて人生を楽しむという姿勢は、人をすごく若々しく生き生きとさせると強く感じた。また、それを今回のように何らかの形で誰かに、社会に還元できたものすごく素敵なことだと思う」と、他の人に対して、社会に対しての役割を意識するものもいた。

そして「たくさんを知っていて、いろんなことを経験してきたお年寄りの方たちと もっと関わっていききたいと思った。その中でいろいろな何かを得ていきたいと感じた。父や母をずっとずっと大切にしていきたいと感じた」、「今度祖父母に会うときは、もっといろいろな

話をしたり、手伝いをしたりして元気な顔を見たいと思った」と、研修を通して自分の家族への労わりも芽生えたものもいた。

今回の研修会を通して多くの学生が、「高齢者」、「80歳」の方に抱いていたイメージ、これまで固定的な捉え方を意識し、それらを変えていくこと、社会とのつながりの中で、自分のこととして想像していこうとする回答がみられた。研修会によるこのような意識の変化は、高齢者理解につながったといえよう。

むすびに代えて

人は経験することで学び、変化することは事実である。アンケートからみられる学生の変化(学び)の事実もこのことを示しているといえる。ここで大切だと思うことは、人と人との関係の中での変化は、片方だけの変化ではなく相互に影響し合い、両方が変化していくものであるということである。

つまり教えるものは教えられるものから学び、支えるものは支えられるものから支えられる、ということである。こうした関係の中で、教えるものも教えられるものも、支えるものも支えられるものも共に変化(学ぶ)していくのだと思われる。この視点を欠いた教育者や支援者は独善に陥り、人の建設的な成長を促進させようとするものの資格を失っている、といってもいいだろう。

今回の研修会後、講師の辻氏が地元新聞の読者欄に感想を寄せられた。いくつかの箇所を抜粋する。「うれしかった！ありがとうございます。県立女子短大生活福祉専攻の学生の皆さん」、「私82歳、家内81歳。二人とも身障者で子どもはいない。心細くないといえましょうになるが、この福祉研修会ですっかり元気をいただいた私ども夫婦」(資料1)。

人に感動を与える時は自らも感動を体験していて、その感動を共有している。この共有体験が「生きる力」につながっていくのではないか。

〈資料1〉

元気もらえる朗読続け60年
辻直正 82(新潟市)

うれしかった！ありがとうございます。県立女子短大生活福祉専攻の学生の皆さん。

私は去る一日、同大学U助教授の推挙で企画され、将来福祉専門職を目指す学生(12年生、100人)の福祉研修会で朗読を披露することができました。ライフワークと言っては少々面はゆいのですが、こんなことが少しでも役立つならと勉強を続け、時には県内外各地、主として公民館などで聞いていただいて、60年ほどが経過しています。

朗読は、今隠れたブームで、各地で勉強会が持たれているようですが、まことに結構なことと思います。

ところで、今回の学生さんたちのマナーの良さ、聞いてくださる目の輝き、ちょうど私の孫ぐらいの年代の真剣さに、朗読している私の胸が熱くなりました。

引き続いての懇親会には家内も招かれ、お礼に紙芝居のひとつもあり、これまた好評。温かい心遣いと親切なもてなしに思わず涙腺が緩みました。

私 82歳、家内 81歳。二人とも身障者で子どもはいない。心細くないといえようそになるが、この福祉研修会ですっかり元気をいただいた私ども夫婦。朗読と紙芝居、お互い精進を誓い合いました。

皆さんの未来に栄光あれと祈ります。

(『新潟日報』2006年7月21日朝刊、11面)

参考文献

- 小池由佳・小澤薫・石本勝見(2007)「福祉研修会における学生の学びの意義—専門職養成の視点から—」『県立新潟女子短期大学研究紀要』44
- 柴田雄企(2005)「高齢者に対する知識とイメージ—女性介護職員と短期大学女子学生の比較—」『大分県立芸術文化短期大学紀要』43、57-64
- 瀬戸雅子・大根静香・石井紀子(2005)「介護福祉学科生の高齢者に対するイメージと職業観—入学時と実習経験後の比較—」『聖徳大学研究紀要 短期大学部』38、1-5
- 島羽美香(2005)「エイジズムと社会福祉実践—専門職の高齢者観と実践への影響—」『文京学院大学人間学部研究紀要』7(1)、89-100
- 内閣府(2004)「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」
- 内閣府(2006)「高齢社会白書」
- 沼沢さとみ・山田皓子・齋藤亮子・後藤純子(2004)「看護学生がもつ高齢者イメージと将来の自己高齢者像」『日本看護学教育学会誌』14、135
- 保坂久美子・袖井孝子(1986)「大学生の老人観」『老年社会科学』8、103-116

注

- 1) 全国の20歳以上の男女対象(層化2段無作為抽出)、回答者3,941人(20代13.4%、30代16.8%、40代16.1%、50代17.0%、60～64歳13.2%、65～74歳16.9%、75歳以上6.7%)。
- 2) 「あなたは『高齢者』『お年寄り』というどのようなイメージをもっていますか」(3つまで回答)。
- 3) 内閣府(2006)、64頁。
- 4) 対象受講生50人(うち回答者47人)、2003年実施。沼沢さとみ・山田皓子・齋藤亮子・後藤純子(2004)、135頁。
- 5) 同上、135頁。
- 6) 同上、135頁。